

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN Tama



文13
3148
5

三七全傳南柯夢卷之五

東都

曲亭馬琴編次

霸侯の宿の上

年七ヶ宿めぐる皆樹の客店。驛稍盡處すくと大にすうる家。されど昔ふのふの生茂る。埋立井の車とも。身上久しく。細代天井ハ中空く。雨漏る。煤を彩る壁の腰張悉剥く。長押より月を引く。高麗縁の席薦とく。切だる。藁を畳む。故事もろひ物。されば竹縁は斜よ朽く。絃断り。琴すら似て。さればとく一夜を明す。或へ廻國の後行者或へ伊勢參宮の男の童。囉糞物。そのを覺えど。さす米をくわべたり。炊く。枕一つを借りて。燈火を置き。半つれの一隊。自異なり脱る。北声す。小曲子置く。篇あれば次の跡の

念佛をす。物あらがひす。題目宗す。声の高たる山里の老翁。
眼の光るの浦曲の五つそ。ねどもとまく。草鞋穿つゝれすと罵
す。管差賄賂されて。同舟の面けぢりとまく。ひだよくもまじ。裏皆出
去らる後へ大風の船頭よ風よ風よ。搔きとせり風の外よ。うり遣らる
べのす。生ぬりくわもあらひよ。三勝へ一向を借て。病たる夫を臥せ
ば。破襖あく。出居のくを塞されば。やる従とめりふもあらねど。亥夜
かうり。彼此入のう。諸の声を吹く。扇むる日もあり。又ふらへよどひく
かく。世を覗むる夕もまたく。ひとまたせ。どよ病臥へよ。かひの
外よ。日を過へ。物もみ詰竭へよ。ひよすべす。常言よ。坐へよ。食へ
山も空へとぞ。よアのする恥を恐がとも。夫を憤へ。女児をも餓ひを
いとく。三勝へまじく志を励く。お通がりをあまびの三味線。彼がり
惜むのされば。近江をゆるむたも。近江力中よ包入れて。りそ未つがは
も破並られ。ものみり手を賣へど。三勝へられとそ究竟のゆゑ
とろひす。海宿よまをあくし。たのびく。よ。彼三味線を抱て。街を
徘徊へ。ぐの門よ停立つ。どうよあくは柳節。後投節と歌を。うら
色米をゆく。その日くをひらか。かきとどよく。睡らへ。おほどす。
絶えく。かくとへん。まくと。まく。まく。まく。まく。まく。まく。
みみうれうか身うゑ。とひふも。ひく。世の中を放あく。ほえて。顔色もや。憔悴。
け。家の近従よ。居れ。君父の蔭よ。ひきあが。人すもくの世を。ほへ。のと
義のなよ不忠といひ。不孝のよと。うりよ。年豐あれども。日を算て食
ひせ。暖されども。ふ。眼の春色。千辛万苦よ。あく路す。ま

賀又はまくらを出るが。又ア猿寝又病鷹の妻又は眞愛をそむけるを。
又病着より苦一々れ。また三勝が信く。晝行後日音痴と寝て
心をせひ門より親子三人がぬの緒を。ニすらの糸又絲あざむ。その
味縞の手の内を。愛る扇と名もす。寂のを夫のきどり故。され
松山筑波山。降として今の大離節も。どちらの人の馬耳東風か。時小
も藝の才が助るほどの薄幸。大和より三勝を妻と。か通を
産一きば。乳母は抱へ傳す。假初の出居より。商人ホトト會せむ。され
娘一とれぞりねよ。されうゑよ三勝よ。くもの物とらむこと。爰よ小芥
うを食を。さつて命とえ。せよありあひもす。自行みてをせ
りしよ。彼が公様と。さがふ。トキや六年生延す。いふ歎を
す。うら。貧の病よ身の病片輪車の足腰と。うらをとひ曉ひべ。

懃小芥。あれがこそ。彼木へ入よ寄。ざりれ。されうち入も憐。ミトアヒに。方
小給事。左。さする。すもあらん。親ハア。とも。も。育歎く。愚癡歎。又
を。よ。経。れ。就。す。も。あ。小父。ハ。下。す。あ。す。國。在。今。こう。地。し。縁。や
締。び。そ。り。あ。く。せ。恨。じ。ら。ん。ど。も。や。こ。ち。活。が。た。つ。が。手。を。指。さ。妻。や
との。え。深。い。敵。も。う。り。ぬ。で。と。う。ろ。ひ。く。よ。覺。期。あ。く。そ。お。立。の。夜。行。よ
ひ。と。も。う。く。ぞ。う。三。勝。の。夜。立。六。合。の。米。と。三。十。の。帳。を。ひ。く。二。更。の
比。及。よ。立。く。ア。う。づ。夫。の。安。否。を。問。が。き。が。睡。枕。く。る。小。枕。う。曉。の。炮。火。逃。へ
う。ご。し。る。小。夜。更。る。う。で。す。セ。ゲ。腰。を。搔。捺。モ。行。未。未。一。ク。我。證。ア。屬。る。小
ま。セ。の。今。宵。限。ア。の。名。残。ぞ。と。う。へ。一。ク。ど。ろ。よ。う。ら。暗。禪。つ。且。一。ク
三。勝。ハ。夫。の。睡。枕。る。を。え。て。階。す。よ。み。を。休。め。て。物。を。引。被。り。ひ。を。搔。抱。て
夫。の。ほ。う。う。よ。臥。し。結。約。と。起。く。火。を。乞。粥。と。煮。さ。て。夫。と。女。児。よ。食。



歌つて。また亦が次の向うより。夕餐も既になつて果て。庵幅のことを
覗たる夜の長なり。脅寝せんへりと。ともとまづをへ揃つべに。と
ひらきされば、あぐづの田えつてく。ともも慾よれあけね。間小ゆり興と。
うち笑へばうち笑ひ。外面へ立出づ。かくて三轡わどろひ。夫子ふ引とつ。薄ら
すくまね糸サの節ゑへ。脅せくともちくねど。そのまへどの門よえ。彼處の
のをと。きく。簷下よ立在が。これよまゝに物と。の自白異のあくす切抜し。紙の假面か
こま。櫻りく臂月を曲物の檜の胴よ行代棹。二條の糸をうけ声も。うく
くうへ。かく。唱ふを「口よ」とぞやけ。」と唄つ。ゆく御を徘徊と
ね。ぬ。の後宝永年間。此はもう又「とぞやけ」とりよを食す。と。さう
らうとする人の所難い。ひどい双六といふのと。さう。又の圖あり。かくも九月十八日の月出
る。外より寒氣山里の虫の音絶え。遠磯の槌いそがくうりと。せのひと
を。良き。する。する程よおせ。病臥す。猿の宿をえと。かみと。廢定のう路

内隣の信濃國。皆樹木を失ひて、それも急ぐ冥土の旅。せめて一ト筆の
遺言をもと墨斗よ筆へ際す。身のまゝあらひこそれもあらずとせんかせ
んといひうそうがふきに日未記憶。多賀莊より女童よ母が小曲を
教へとね。くせうりて縁ひ一うぶ。されば教へてあた後よ。おせを身をとひとし
あづれ。直政やよかと久しくれおが縁あをせうび。母のゆりあうすゞ。と徒然小聲
ありよ。縁そ笑へあひこよ。とりゆつ今宵の遺言をひひ。歌せんわか。とおまは
ども稚うるよ。物めくらうて心い。縁ふと。縁ふと。唄ふへけれど。三味線をと
りあく。と弦を掉をとこうとも。ひぐりれが父のき。胸苦しきを紛ら。微笑
そぞれ。二味線をとも唄ふ。近づく流れ赤夕のうち。唄ひぬ。といそ
がまれ。それも久しく唄ひ間。うち忘をなと云ひやが。教虫と愛み。小廢
のほせば。またと母親が忘れてゆく。破扇を。遍あがひを。拍子を

う。声ううあぐく 喰ひる。

○赤た物のうふ

たの唱夷慶安二年の印本を草紙上の巻草せん張みえ
たり。編者の自注。是が下とを西らの本の時分京童の小字をとま

ううと。赤いりやと。むらうたのうきんくよ。妙覺寺の二王門百

万遍の山影堂。天井のうみのと。赤の明王。天火。まつま。朱すうぼう。

いより度の瓶火。祇園度の大す。山王の鳥居。猿がううわあ赤み。早川主する

のゆうじ。きうこう。紅梅。ひまや。ひがも。びじめんよ。びどん。せうど

のひうじ。綿綱のうんらす。うへうどん。りうちす。小野木友のう

ううを。おひの山門。かへりのうへり。朱ぶや。朱具足。うのうら。

猩く熊。高雄のうみじよ。うの山の岩つじ。けのえ。むとく。不柿よ

ふくへのううの木のうりかぶ。達のうりに。鱗のうみ。うりえび。赤が

赤が。赤うつ。ううのやうと。うにう。佛がううのうらび。うら

ううした。朱盆のかの口ぞ。茶盆のかのそべざれ。うやとのづさん。う

まのまう。ばよまう。朱さん。朱う。だらう。ばく。朱つぐ。朱う。う。

王のもう。うめざんじ。さくらそのうん中。あやうん中。

と唄ひとわれば。まざら。うら笑ふ。長たると忘れちど。どそそそ

唄う。うれよ。うれよ。うれよ。書らのよとく。福がもあつ。今夕が歌ふ。

う記く。母が。う。唄ひて。書られあく。廢の餅りく。餅と。賺

と。稚よ。う。奥の風情よ。廢美よ。餅ありく。ちよ。記

ん。教よ。と。と。ゲ。小膳。すかつ。今宵元ぬ。又の送言と。もと。と。餘念

み。父の。自え。ち。唱あ。も。口へ。歌。こそ。うの調。うら。乱。さ。浪え。ち。と。ざ

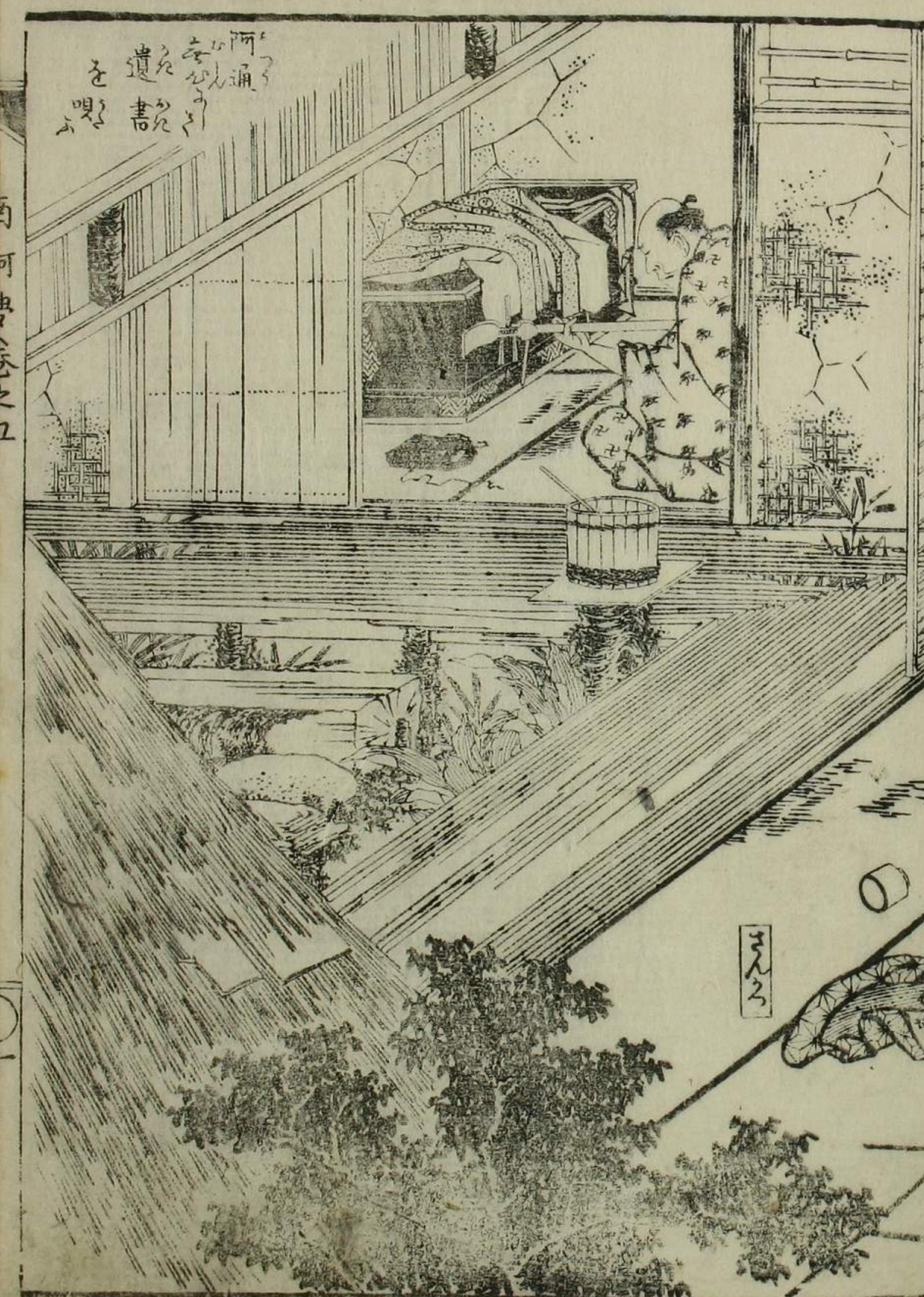
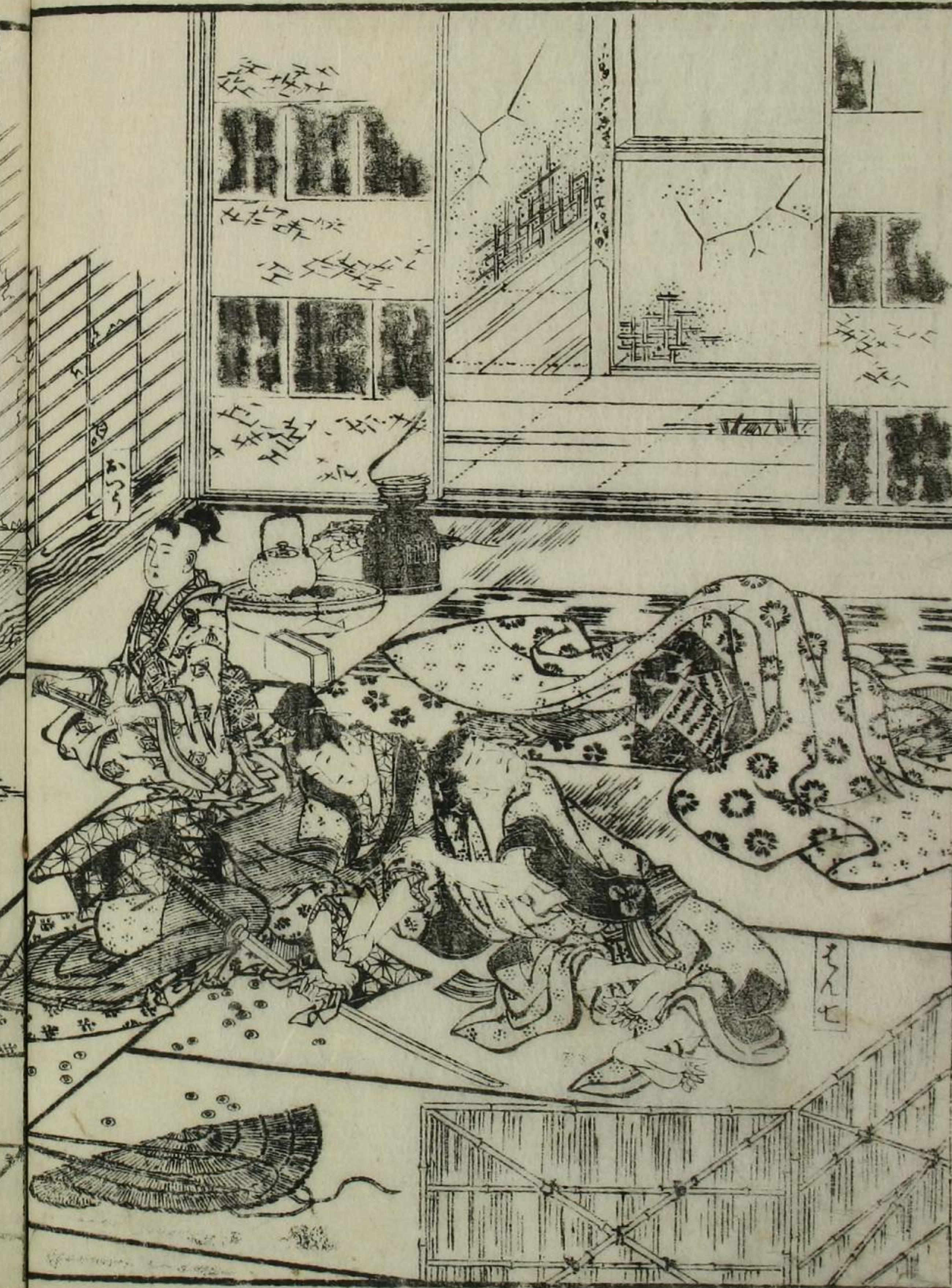
く。猶。行。う。一。声。細。く。長。く。い。節。急。る。曲。只。漫。う。う。う。篠。く。下

教。も。が。通。へ。と。ち。ひ。り。う。母。ま。ゆ。う。う。三味線。渾。と。唄。べ

なよあどくゆりあひる。彼三味簾の張り幕は放り、射又や嘔嗚かを
いと遙一と詰らざ。おびよ睡を催ちば。入へ女児を引奇つ。とく記一
忘るあよ。聞ひ母がりむう。誓もせん歎たもてん。常より暮らうと寐よ
といふよ。今宵ハニ更よ寝もありし尿もまへ来よ。とまをとれど。立そく
に蹙足の膝を枕又睡顔。ぬべ覺へてち魚ちね。又がよの教をつぐ
とえねばありバ壯士の勇にテうち思愛よ。すうきみにほり保あう。且して
隣うちうき。噫これさううひがひう。お義のみよ捨一命と。妻やみよ
鮮されそ。さよまく後する悔一きよ死セうと女うぶ大和ある。園元
が恨ち散父の怒も解ねべ。とくらへとも。三勝が夫のみよ乞食しと。
頬とさぬ公操ハ比稀う。貞女の想。家を失ひ今宵又。されよ
捨れ去夫婦一世の別とす。あくまで金を慕ひ。女児ハ母より父がく。
画影をえ忘れさう。年長物の哀をも。あら祝悲しくわらんす。

蛇氣ちるくてちむらう。母よ孝行盡せし。五才の娘子が二の緒
小のうへて唱ふ歌も今。親の末期の役も。是も過世の葉因も
ゆくとくも教しる。唱ふをみ忘れと寝顔を取く。暇乞延るらと
膝を引。親子離ても渴ても。昔忘れぬ両刃。又の像見の乱焼。古れぬ武士
の魂と。押戴にて。被もさら。襟もろひ。中刃残。腹へ突立とす。折
しも。間近くはゆき足音よ。また二猿がゆりし。と刃をくへて。おそれみにあ
らう。次のるの障よと。廻る。と暗く。とぞやけ。とひどうらう。
口と笑ふ声を聞バ。甲夜よ歌モ一旅客也。彼よもあくや。二猿が帰
らぬ隙よと。からもく。えとうきよと刃の先よ。不圖目を寛見と稚児が
五歩と戸又引れてや。三猿ハ喘く。走りゆりて。倍とえて。吐嗟と内に

張り入り。夫の巻きよ携著。といひ袂も翻り。ちるくと落葉と米搗で
雜する周章へ。ま七八声を廻して。怪我なども。其處放せし。呪り退れ
ど三勝へ。引き届ける一生懸命。諒故をばうべり。役へせどと携りよ
む。旅の先ふ冰の刃。及退んとちやどませ。病瘡きそらぬふうす。ど。
さう頻々焦燥。縁故をばんとあくべ。ひゑことよくあつてあれ。こ
れを後又向かへ。笛うへ却恨く。となりうけ。三勝の意をばんとあくべ。ひゑが行
をうへ。竹うんごれ物もねひあふ。とらふをませはまちあふ。すよを。甲夜の
唱あを忘生。いられまく女児の目を押拭ひ。母まよひを。父まよひ
書かれてのふ縦あを記す。記すりゆる。三味線を渾てあわれ。と
うかるとも弛まく。とその父の達云をき。死後小供へとて。女児小教た
まる欲。夫の今般み三味線を。彈そそぎよ遺言をばく。母程によ
ひあじ。理あらうをり。どとも。父とよ笑ひたるやあが。かしあとひときりせま
ひ。色ひ改をうち掉る。三味線うくとくをうくとくには張りえんと宣ひ
たら。小さどくみえりて来あら。やまほくの彈め。ひくもむら寝なふ
餅をぬらさんと。回答へて死んとす。父。ひむ母のむらぬ哀れこと。洩ア
そや次の間ある。旅客が揃持。うちち二どらのりとけき。女児も耳を側み
。三勝の賸り。すよを。おれを。けむ。母へこゝを殺されず。外
すがく彼撥音よ。おりて。父の遺言を。笑へゆくとり。新をばく
つまし。思ひ母のいはゆ。泣ゆ。涙すまほく。唄ひやうやう。と。ゆを
ぬて。おを膝より。稚兒声をううあげ。彼三味線よ。ほつ。萬を。正量
みどかる。よの。四よ。旅寝。木曾の梯。うね。せき。襲撃の
名うの。病て。伏屋の里遠。仰くうえの山鳥。うね。啼と更級乃



田舎の月の新き。うればらる千隈川濡ぬれさが袖そでとつまうの神
も締しめぬえすとて。契玉けだく傍あわらが山嶽さんくわくに煙えとまらのぼる。ひを
さそと久采路くめぢの橋。放流はなりの湖冰こひやるとも。只都井ただのみいよりあべ。東方とうが
の陽ひの東ひの向むか。寐覺みよの床ゆの寝ねんねみも。そのちうきじしきくみ。
もく木きとこそそ莫まらふらむ。かる歎あきなよあらちの園いんも。こえて御坂ご
さりえよと。やふぢうりぞ愁う。子こをうち月つきの駒こまや食くむ。うれせを
まろ琴こと科のの言ことの葉はあとかれかれを遺のこせ。

とうと果こ生うば三味線さんみせん。己おのの撥はきぞかかある。ニ撥は唱うたおとゆゆば。是ま
悲かなく死しる限かぎ。病びやく死しよ身みを恨うらす。死しとらひ定さだめあふ。理こと小似こて
理ことあく。終つまよ残のこる妻めや子この公おも精せい一いつ。やらんとへ親お
子こよ。誓ちかく。こまちの一ひとの緒はじ。形かたちくらうよかるううう慌忙わんぱくしも夫おの

必死ひじを救すくへとく。神じんの召めれあひり。殺ころせど。どうに口説くわだても
でも。また死しなえならひらままと。ぶみの中城なかじ唱うたあよよ。あくくととりうき
死しうれううれ。其處そこ退のり。鳥とり噪さわ。退のり。と争あふ。二に親おの異ことる貴き
き。我わは。誰だよ。行ゆたとらひらままと。悲かな。一いつと法ほ獄ごく。

押おせ。よれれ。背せととののと呼よ。二に味み線せん。提さげて。三み釋し。

られをえくらよ。甲夜こうや。歌うた。煩惱ぼんのうの。西羈せいき。意馬いも。接つ繫つ。うねた
けれど。とくらよ。心こころと喜うれ。と。言こと語ご。うりうり。

西騎せいき猿さるの宿ゆの下げ

このよき辛から三さんの才さい。セよ對たいひ。惠めぐ卒そく。不審ふしんもかまんまんが。夢ゆ

女児が物語りよ。ナモ召へぬか。おれは笠松平三う。おうちよ今宵と
の驛路とぞそれよ。ちよく絵歌を賣。彼の門より在女子あり。笠松平
画をめぐられど。その声をすくよ。女児よ似たり。それと口ひきよ
も。さくら園。こゝよ立つりよ。空鏡ふよ。果してそれも。船とてごく
わいし。うづくまが送言の題残すんや。名告ウもあう。どの二味猿め
まくるのを。あらめらく操持。五十又乃老がよよ。橋た孫が遍小倉
彈みふりのり。變らへ。声をすく。夜の種。葱びらく。竊柱。機の需
度も定く。あくと戾る。巻よ。音縛も。涙る。憂變。恩愛の物うけ。
身が自害をひた。苗る。綱子らびの不骨者。あく。泣き。張をく。
東の果を。呻吟も。三ツ。社方を。あく。まほ。さく。くらぎも。歌を
あく。て。ひづ。堤月と殺せば。どりひも果をつと寄る。矢庭よ。歌を
棄へ。すく。鞋よ。おも。三ツ。よ。遍古。りふ。腰。六年的。ひとを
二條河原よ。ひおと人よ。棄ひまられ。とも。脚平足平を
殺一。なす罪。腰かくらひて。その夜。洛を逃走。四年あまりを奈良うそ
く。高天神の茶店よ。領主の代。糸く。かば。武士。割。龍を患
ひ。大佛のほとり。到く。これを披け。とも。うけ。飯の中よ。一包の金を埋す。
三ツ。豫よ。三ツ。由縁ゆく。立。徳よい。と。赤根。六野のりを。同
里人。塔よ。彼人。の。兜。す。セ。とい。が。の。落。よ。あ。と。三。ツ。う。と。義。く。落。秀。行
逐電。ちよ。罪。よ。う。と。永く。仕。を。此。う。と。直。執。虫。あ。め。と。と。り。う。と。う
至。く。それ。ひ。ら。く。三。ツ。を。棄。ひ。去。た。の。結。髪。の。夫。ま。七。ま。く。あ。と
とも。あ。う。それ。か。方。人。マ。と。徒。と。桃。と。争。ひ。と。殺。と。大。罪。を。犯。で。こ。を。海

クセ。かゝらば。すゞして一言。されよりあくとふてり。と恨もあがつ。疑ひの厚
解よ。彼金を投アリ。のれん。彼がもうとろひ迷ひ。その細いにをそん。南都小
え食して年月を过せ。終よ身の性方もあれど。今ひとそ彼地を至る。され
それより猪園の灵場を頃礼して。此秋善光寺へ詣き。彼此を呻吟とも。
じわう。件の金の一粒も喪りど。年も祀ね。小曲子を唱ひ。路をまく。の向う。小立
散す。死よ存命ならぬ。あら。五年の志の致した。夫婦が中よ儲かる女児。されの大和よあとす。またのまく。禰を福て
三番が夫よまると。まく。うね。されば又只ひへう。夫婦が稚樹の元も
うう。されても老よれ。さるみても彼身償へたり。贈とす。またど
のまく。六年以來の疑を。もく。と信すよ。因ど恨もあら。すも。
えのぬ男よ。まつり。恥と。さへ。傍そ。回答せべ。三番ひくうち

3. 羔育の恩を仇う。罪をひき。物をとり。はく。世をとくし
作。不孝ハ勸解。言終ひすれど。淳じ。情由よく奔走する。あら。ど
是夫が患疾。かゑよ。不意よ再會。ちる。もぐ。也。同様。こ終をらへ
如些。こあり。とく。園花がて。吉稚丸の。二郎。を夫。曾を卒う。全八。
蝶九郎が奸悪。よゑ。う。一五。千を物。ごう。且。自。行。す。もの。内。体。ま
賀の。莊を住。よび。近。ら。廉倉。て。ま。縁。まち。う。す。七。が。暴。よ。病
す。進退究。も。物。よ。沽。竭。一。も。ぐ。あ。と。す。それ。彼審。よ。ま。え。ひ。も。す
も。が。平。三。ハ。ま。く。無。よ。嘆。賞。し。く。己。も。そ。の。よ。そ。ま。せ。ひ。す。す。頭。を。奉
縁故。目。今。二。務。が。ま。う。や。か。一。が。それ。自。行。す。て。死。と。が。り。し。を。二。務。す
練。られ。か。る。形容。よ。く。聞。男。と。の。名。生。に。あ。か。こ。そ。い。と。面。み。れ。示。ま。る。三
務。が。身。價。の。よ。く。例。統。井。家。の。老。臣。原。倉。二。郎。を。夫。友。春。が。む。の。ひ。や。す

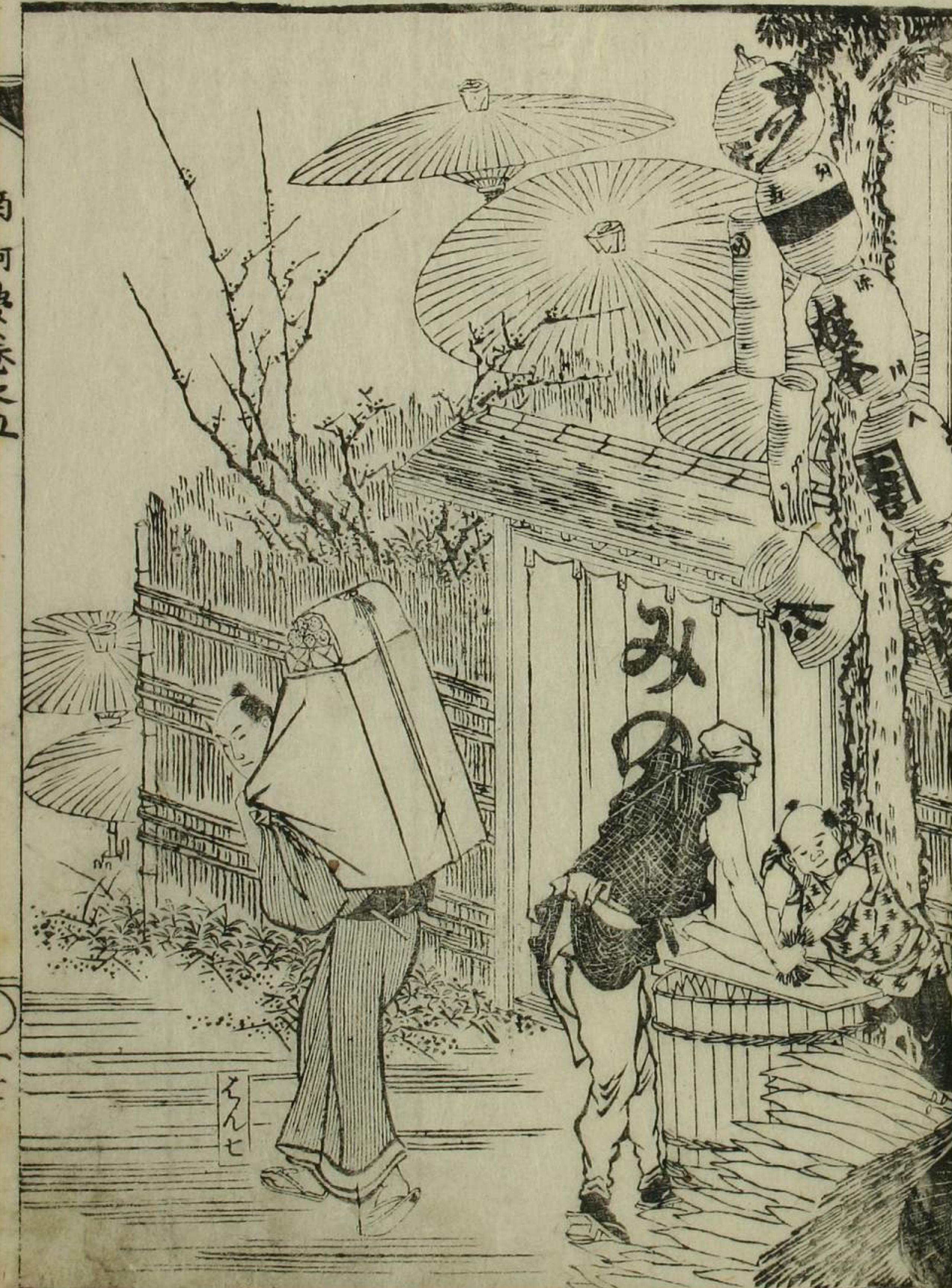
贈りしにそのうづめ三勝を。結髪の妻をもんあつと。されどもくび。彼を棄
去て。郎君の心惡名を零め。直に刺殺して。それ又自殺。情慾の心うそ
する身を潔さんと。品官らへ定めれど。恨むるたへの女呪を虐る。もの罪へい
と深し。やあて三勝づき價へ。その親よふへ。あべとて立篠み。旅宿よて原
倉氏と。後のゆゑく相縦むる。被入言を食すと。件の金を殺さる。ちうるよ
く。身の義をすりと。その金を喪ど。艱苦を厭ひて。三勝づ。往方を索めゆ。せ
みや稀見る大丈夫。さしが足が不よあくと。頼りく。と。顎よ稱賛る
だりしき。三勝も又嘆賞を。卒ニ笑て。ひなづれ。女呪よ。翁くはま。られども。
彼が彩雀の體骨を賣る。自の老樂をもたらんと。うぞりだ。られ意氣ある
み常く。只ひ夫婦が死忠の烈火。日残同く。猪がじ。の夫すと。うの妻
あり。誠小一世の奇耦。天の結る良縁也。加え孫女呪が怜物する。容止も父母
小似うのと愛す。年へりくつも。名の行と。ゆきと。向と。かをハ雄もお持を
ひぬ。年へ初。名のを。とほれ。日未母。山がそよぐ。もし。祖父。まきの在まつ。ひ
あじゆへ。うぶ。とくは。うどひ。けり。ひうき。でもこよかぬ。父。まゆ。母。まゆ。中う
と。誉められ。もと。のり。けり。言の禁。又。二親の袖。も。す。ぞ。か。た。わ。る。卒ニ。日
を抑。拭ひ。膝。よ。か。き。を。下。載。う。が。る。女。呪。を。り。ち。く。ぎ。く。元。と。あ。り。の。親。も。親
恩愛の絆。よ。ハ。貲思剛臆の差別。す。猛。お。勇士。も。から。く。ぬ。の。を。鬼。く。れ
も。も。よ。す。れ。と。恨。む。も。親恩の啞。言。す。す。お。せ。り。卒ニ。よ。練。られて。終。よ。志。を。果
し。よ。ど。く。く。宿。の。あ。づ。が。取。た。る。套房の方。遠。され。ば。み。件。の。よ。と。き。う
小。更。よ。く。く。宿。の。あ。づ。が。取。た。る。套房の方。遠。され。ば。み。件。の。よ。と。き。う
を。辛。ニ。の。膝。よ。睡。れ。る。お。を。三。勝。よ。抱。く。じ。胴。巻。の。財。布。よ。う。奈
良。よ。く。ひ。く。自。價。一。包。を。よ。う。却。く。夫。婦。が。向。よ。か。た。く。く。三。勝。う

若節もうへどして。今かみよ。彼、身價百金あり。これをりく。ませど、
醫療のきよや。身の病着へりふもさう。貧の病も又愈えん。おほく
おひき。といへ。愈へつ。それを遍ふらば。ませ改を左右よ掉。畠の好音ひる
みすゑとどか。そあ今いづ。夫婦のみよ用ひげし。故りうそとされば。前よ
もりへつて。三勝をませ。夫婦のみよ用ひげし。故りうそとされば。前よ
氏。彼が身價を投す。その船は觸れず。女子をあらう。おもと舊の
妻。うそとあらば。今へ投せば。おも又愛あべう。まを今これこそ。舟
を安うきんとぞうる。そのお義もいとぐる。其金のう傷きく。折とり
傭金を返し遣し。又此の一生へ。夫婦がともやして娘あべ。うきせよ。わ
がみふ達す。そんざいもうけむる。といふ。辛ニうきな。うき不實すう。あり。といふ。今
え令を返せば。只一夜の中よ大和へとくよあらど。まじこれを借て腰革あ。

病愈え後。その缺だを調逐て。舊日へ返とも遅れず。あらど。何より
も平ニようらうへゆとり。こ勝ち又まよく。言縁を竭して。
アヤト納得す。また次の日より。段師又えどく。價貴を
茶品をも厭つ。それがいふまよ。療治せり。するあくまよ宿のあく。
夫婦へ平ニがまセホとアヌとも。逗留ちるよ至る。もじふるも似
た。残するをえく。汎もみだ。見る間もく。款待へり。さてすこ
二十日あく。を徑る。まセか病着ちこまく黒。不足薦のよく健よ
えりしき。二勝へり。まく。平ニあく。飲び。まセよのふ。まく。あく
簾倉よ。起ん。まく。おき。く。浪速へせん。活業をちあへ。彼の
へ洛へ遠り。それ又土地の人氣をあれ。まく。便宜をひく。元
うそとて勧へ。まセられよあらど。親子四人。遂に皆掛をだら

正更に西を存する。十日あそびて。浪速より到る。長町にて不
ふ備家して。三よりともよ脇を容と。行をがみ活業よせんと強まる。
平三の原未能優のよすれ。長叟を仰ぐよころをゆく。われうり
おひつたくへ髪とひのを作りし。ま七八毎日よ彼此よめく。生て
られを鬻ぐよ。髪うじたり。改髪吉をさすよ。究よ。うと
買へも多かり。そのうち三勝。又蓑鬢又とりの假髪を生て。平三と
ともよこれを假り。そのうち三勝。又蓑鬢又とりの假髪を生て。平三と
勝たを掩され。魏宮よ蟬鬢を製し。綠雲擾く。曉髪巻を
梳るが。婦女子大よ眩重し。蓑鬢曼を假り。さればちの蓑衣をば。から
綿号して。長町の蓑衣とさんばびよ。さればちの蓑衣をば。から
くの入りあらび。隠蓑屋と世をなのが。すてもうろの外よ。商人となりやす。
あ
住げ又住うの。岸の姫松年預御達假髪めされよ。の外よ。髪吉結眉掃
玉櫛筈。とふくとを近く浪速津を。はあけども背樹よ。数日の療治
小三稼が。自價を遣へ減ら。又らよ来よ。活業を残す。本降諸
難費。されば二三十金よ。足らず。とすよ。贋ふみ至らざ。ひよして。件の金を
舊の數よ。厚倉二年を夫よ返さず。親子夫婦。られかねよ
りそのを盡し。夫の所の活業又解ら。妻の又節儉を崇よ。ち
飲食も薄くされど。もうう細た瘦せ帶よ。二三十両の金を。忽ち
小貸道知。とぞうかあく。られのをすよ。ま七八父よ六が女否ら。あらも
とあらねば。ちのひよ奈良と立派のな体を。探廻す。まわり今よ。ほ困こ
められよ。ひとひらを。ふら。室を。花り。下と。想思病よ。うら臥して。うり。
たえよ。首を檻む。もの七年か。死も。アラ。伝わ。アラ。それよ典籍

蓑の
行乞
笠松
蓑乞
穢古



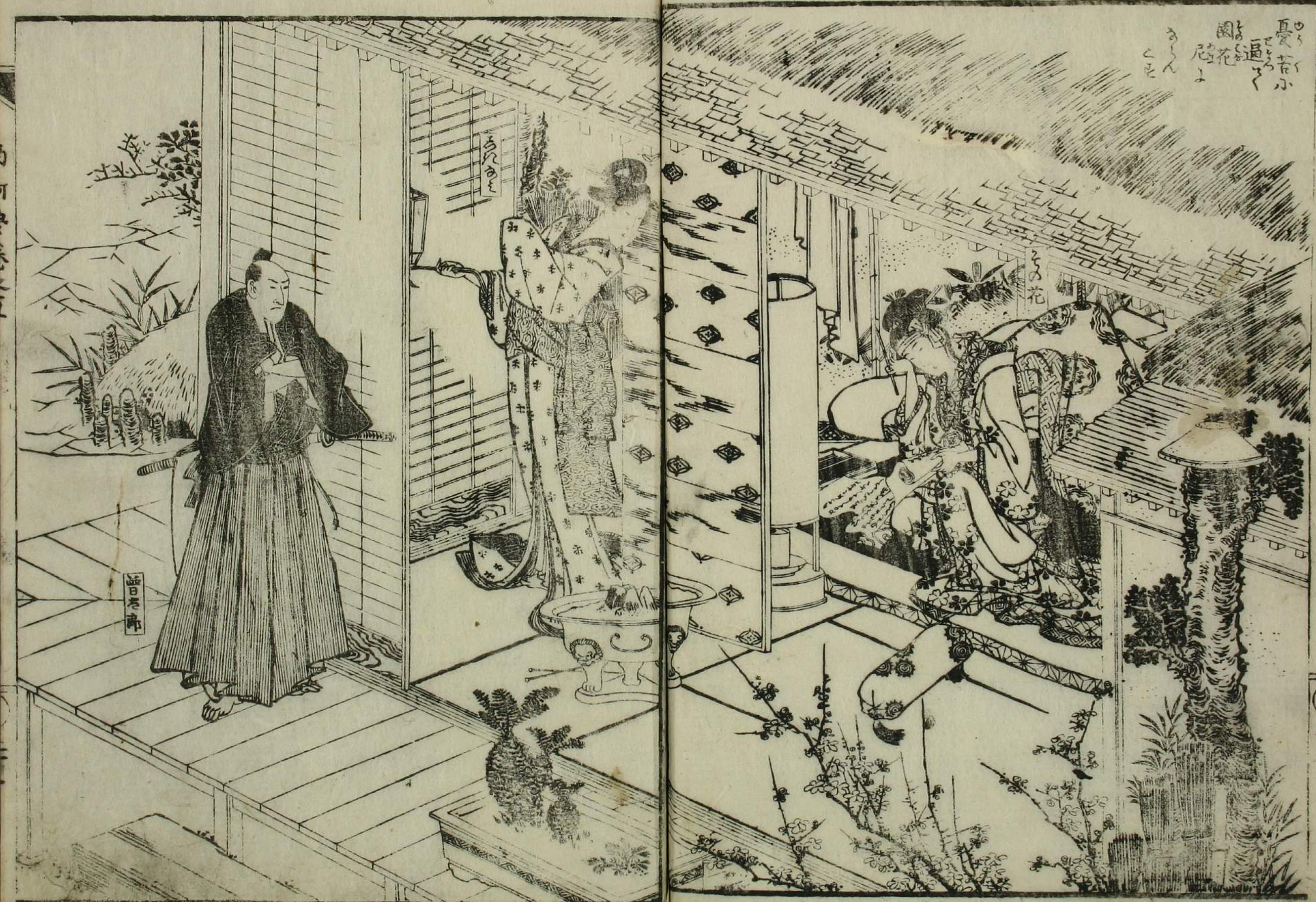
夫婦を失ひて、才七を恨み。女嬰を産ましよ。練うらでくゆ
ひうちたまよ。縁りを結びとされども。園花へいふ。志を固めて。
けりど。且とも暮るか。才七がゆのゆよ。ひはりとすえ一ヶ才七
れ。父もちや。トシヒトモとび。トシビハ懼る。齡るよ。されうゑよ罪
を済す。久しくからめえゆふ。ひと柄を。とうら。薫た。園花が公
操じ。不便あれども。父を被ひ。彼女子を慰む。あくび。二勝もこ
のふを笑ふ。園花が公の中を召ひす。夫をかづひ。されば化もろこ
らぬりと。アラ夫婦を命る。復速よりとゆゆく。さとぞ始
とおひゆり。下しき縁故を笑え。後り。うが身り尼よあべり。と
あり。経をすせよ。告に夫がた義も。まき。うみだ。大和へ帰ら。かく。
やうある神佛又祈りとど。

主君の園の花

さくも蟬松典膳が女兒園花へ往年才七が奔ととめりとすえ
娘とやふ氣をそく。冥冥の形またを歎くのまゝ。望を失ひて。ほゞ
とおふや。が夫を人とす。そのふざよ貞じくとべ。奔くうんどうく。ち
惑ひ。忠孝両立。缺ゆふやうんあくべ。彼奔くへ豫て。笑えあし
む。稚馴染の結髪がまことやうんやうへゆうが。款志とば。彼人
存命く。終ふやうく。ふ環會。己とく。ゆどりうともふ迹を圖く
也。これかくやれらゆふ。深た私こそゆくとく。遠く慮る。と
墓をたのへる。永く。後の雨。枕も。枕。指。目解。長總の長
病焉。ところじよう。針灸。藥餌も。驗を。又母へ。かく。為か。いふと
胸を苦へ。さとぐより。渝。才七がゆふ。ひ絶せんと云れ。

却病をうへふとく。只典籍も義理も憤を忍びて。はせがみ代
いひも罵らど。その花ハス密ニ五條へ消息。そりくは六が安否を
問。られ日來嗜ミ多ひのく。彼ハ堅サキで。元歯ニあひうへとて
挿の廣り。魚肉野菜調理するを贈奉。又執事居り。氣の
持と申す。佳酒を贈る所もあ。春のさうり冬のそぞれ
小。衣服の洗濯。も公を著。うねづえ。うねやう。賄ひ遺らふ。
又母子へゆく。匿して。うう利する奴婢。只二人。この條のみをとら
け。年六七。園花が信す。小感悽を拭。ゆき。されば半ヒヘ
諒。まことに。かく信す。かく貞女をゆき捨てる。さすが虚見
の子へゆく。ざしが。笄に。とり。老。孤。不魅られ。親モ。妻モ。心なす。
九つの子。生へ變る。も。また。子。又。おど。只园花の。実の女兒と
ちひ進。と。も。ふ。か。び。と。限。書。写。る。返。り。も。日。か。あ。り。じ。と。そ。
かくて春去春來。既。又。七年。を。五。せ。一。よ。の。う。誰。り。と。そ。も。や。
ませ。ひ。舜。く。を。妻。と。く。良。速。の。片。便。と。う。長。町。と。ひ。と。そ。も。や。
今ハ高人。と。う。て。蓑。屋。と。ひ。と。假。毛。と。ひ。の。を。鬻。南。う。宿。業。と。
ふ。通。こ。ひ。女子。と。産。既。又。六。才。ふ。き。ね。大。新。へ。十。里。又。是。と。ぬ。浪。遣
津。よ。住。ひ。と。せ。も。人。も。憚。ひ。と。ぬ。鳴。呼。の。白。物。され。と。く。謙。中。り。あ
ゆ。ひ。の。よ。ど。ん。と。く。更。よ。安。た。ゆ。も。く。あ。る。と。と。入。や。と。ゆ。ふ
不。慮。の。よ。ゆ。う。と。く。も。よ。ア。が。身。の。好。く。又。よ。勧。め。か。と。め。え。と。ゆ。ふ
と。ゆ。の。人。へ。ゆ。う。と。く。よ。や。ふ。夫。舜。く。を。ほ。り。く。竹。園。の。浦。よ。在。を。る。

外まへてその安否をとつとむ。慰むるがものなかれど。まがまの支撑よさめいにて
言告せりん便もあらず。さて風声をひ止よひとす。ひと胸ふく
おおほりも果しく典膳だいぜん也。はせがみやべくあり。大よ怒おこり。密ひそかに従なは
縁由えんゆを物ものかう。被はりすく。年暮ねんむきの憤おこを散さんとらすと婢めい竊
室くわいしつ。應おう園花えんかよりと告しのよられば。園花えんか打驚うちきょうたゞ。さればとも。が
おとよ達たゞね。今へ思おもふを教はく。又母おもを凍こご夫めを教はく。年暮ねんむきの滅め
をもとぞとぞけらべ。おとよく。とらひ定じめられど。まき色いろあめうらさど。須
五ごも年極ねんごくの上旬じょうじゅん。霄そらの霰あつこも吹雪ふぶき。ゆくゆく冰ひやる夜よ。園花えんか竊
小起おこり出で。そと行燈あんどひを引ひきよ。腕うでも細ほそく力ちからく。寝ね乱ま一いっ身
髮はのもの顔おほろを搔かあぐれべ。只ただあやかすもくびる。院いんの墨すみを
搗う流なが。嫁よめのととの硯箱すずきとう。夫めの放はとくが後あとを。時繪ときゑちじもひづる。
夏毛なつけ秋毛あきけと手筆てひの命め毛けも今霄限よる。とも思おもひかへり又母おもの聲こゑを
ひとそ。と推量すうりょうらと翌あさへと身みを啼鳥うきじの迹あと細ほそくと書か写うら
讀よく。かゝるえふもやがくらへ。親おやを祝のぶひのく。ひらしみく筆ふを
曲まげ卷まき納ないとよくふらひものアゼ。りうの役わくノ閑窺かんく。まくらく屏風びやうふ
搔かき。内うちに入るを又また母おや親おや。園花えんか阿あ吟ぎと驚おこたつ。忙いそく遺書いしょ
を。秋あきの内うちぶりよと。又また母おやへ見えぬ良よそ。ほとくちう居ゐりやせう。
時とき今いまへ寒さむも殊ことよか。ゆく病病くやよう。小夜こよりく行ゆ
そ。うあづへ流ながく水みずかと。あゆみと。病病くやよう。小夜こよりく行ゆ
願ねが事こともかくつ。顔おほの細ほそく見える。毎まい。おのの病病くやよう。苦くる。嘆たん
へ。ゆく夜よ迷まよの声こゑ。ゆりぐよか。睡ねら見みど。もうふ今宵いましへ常つねに



と。人をもひど記せり。へ近曾頻々同せ。ある。ナセガヨリのあゝやるま
べ。さくあすねくと同。園花はひ候。さくと。イカレ。いは。夜。せきと。春。
狼へほくと。女児の顔を。ナ。覗き。痛。や。アラシ人の苦勞。こと。で。いと
面瘦のえゆる。この。風笑。を。ほほ。ひくへ。あう。ねど。笑。一。もの。うきふ
黙止せ。が。せ。セハ舞。くの。三。猪。と。や。うん。を。付。ひ。高人。と。う。う。て。浪速。み。あ。り。
女子。ま。産。一。う。と。そ。養。こ。の。う。死。く。あ。い。由。ひ。う。ひ。く。腰。う。て。搦。う
て。年。耳。の。憤。を。そ。う。え。ど。ひ。れ。ま。と。ひ。つ。ば。う。く。と。ひ。寛。て。け。よ。ま。と
モ。う。つ。ス。り。ひ。生。る。今。宵。不。や。う。れ。ど。ひ。オ。グ。五。條。へ。嫁。く。ゆ。ひ。一。ば。せ。女
誓。つ。う。一。オ。イ。と。結。髪。セ。一。サ。子。の。う。死。ひ。オ。ヌ。笑。え。か。じ。離。別。て。奈良へ
ス。リ。ウ。ト。リ。ヒ。つ。る。ス。ロ。オ。グ。誠。ひ。を。告。く。う。と。ロ。後。を。い。タ。を。竊。穴
あ。く。る。う。ち。わ。れ。バ。此。彼。ち。ひ。あ。ん。き。う。ホ。リ。彼。三。猪。へ。は。セ。が。結。髪。せ。し。
女子。み。の。う。が。う。欲。ア。レ。が。彼。人。の。根。の。み。あ。と。べ。う。く。も。同。考。と。縁
を。締。一。結。び。う。親。と。親。と。が。過。き。ア。レ。が。と。く。ひ。肩。が。引。ア。主。君。は。せ。え
あ。げ。う。門。許。を。受。婚。姻。を。整。せ。一。ま。で。が。正。室。う。う。嫁。彼。人。結。髪。乃
つ。妻。あれ。が。と。く。そ。ん。私。の。縁。一。う。ア。レ。が。や。れ。ま。せ。ハ。大。和。へ。ゆ。き。う。う。う。ね
ど。君。又。は。遠。う。て。モ。婦。ハ。夫。不。従。ふ。が。常。の。道。され。ば。密。よ。う。理。と。述。く。
口。を。浪。速。へ。送。ア。遣。と。ぐ。う。う。う。う。挾。ミ。女。子。の。う。う。う。う。う。う。う。う.
ぬ。不。為。を。く。歎。き。を。ま。う.
ヘ。夜。の。鶴。夫。を。ア。レ。モ。子。を。慈。ゆ。り。づ。ま。う。芳。イ。づ。き。う。猪。ら。ん。う。う。う。う.
な。う。や。う。う。鶴。夫。を。ア。レ。モ。子。を。慈。ゆ。り。づ。ま。う。芳。イ。づ。き。う。猪。ら。ん。う。う。う。う.
み。う.
の。ほ。た。ま。う.
う。う.

お七を耻じめ。おまへや母が憤る。おとさんとおひゆう。
お七を耻じめ。おまへや母が憤る。おとさんとおひゆう。
お七を耻じめ。おまへや母が憤る。おとさんとおひゆう。
お七を耻じめ。おまへや母が憤る。おとさんとおひゆう。

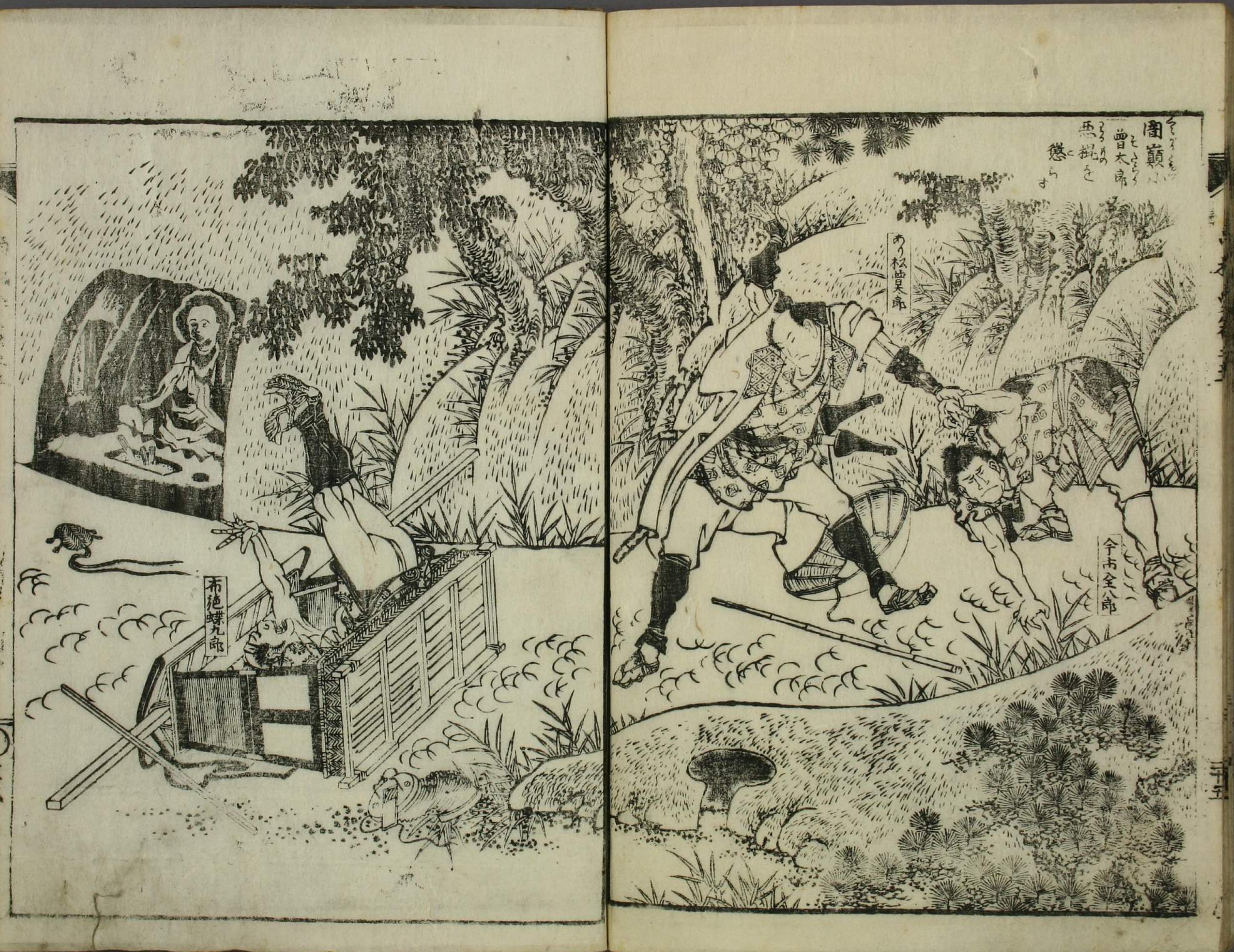
そが。園^{そのまゐ}花^{はな}ひよくうち枝^{えだ}。とみ物^{もの}俸^{うぶ}す。又^{また}かゆゑ。又^{また}上のも。も
ると。良^よ速^{はや}へ。卦^トやゆゑと。故^のれを。推^{いざな}辭^べ。あん慈^じよ。情^{まゝ}不^ま
をりゆふせん。ゆふせんとて。往^{むか}ひ。六^{ろく}の元^{もと}も。消^{きえ}る。今^{いま}や。七^{しち}の

間うう。十三鐘とゆうともふ。枕土圭も寝てうう。いざ
睡うと母親がとうまも亀え。おも玲る。夜の冰うみも。
臥草の内うう。ゆうやく自殺をとどめう。うと
ふ蝶松曾太尉へ。母おも浪がおびゆう。暗譚つらう
ゆうをゆう。俄頃よ浪速へ赴く。はたが隠家をもつ



為体を窮る。時宜ふうべ面あらず。妹が心操をもとせざる。と云ふえ身孝ひふた社伎まれば。アガシよりの生氣ふるくちよ。兩三日仕やくる。同僚们のあいせえ。又ハ法隆寺へ詣る。ことひこられて。次日能頃より装を整ふ。冬日の短くて。もや申下刻より。けど。乞忙トタミバ。従者只一人でねぐ。漫々立牛が路一里をゆふ。日も暮れんとき。あとうふ急ぎ。鎌袋をとす。あとも。闇するふいと便び。ほとそ。従者をが。其不よりまつゆ。尼が辻よ到く。されをねよ既に初更の比及す。そのゆめりとおざしげが。おきづふねうび。遂に巷轎を傳ふ。圓顛を誰そ。あとも二人の轎夫。林兼する樹の下よ轎をむし。？。おろきのおりゆう。ひと難儀する巔を越す。才重尋常よ轎を。夕ハ脚骨を痛む。彼も我も脚氣發り。今ハ一足も運動だ。

定の建場まで。今索一ヶ夜。こゝろ暇をもつてべとり。曾太郎
これをゆき。腰うち戴ふる。すすり腰うら。病痛とあひがせん。そは定
のあまがへ。母遙うれど。足の数のあくとよさうと。すえそじつ。腰うち打
達の財布を解く。残三倍を返す。とさうふ。橋夫へ手もとで。冷笑ひ
とくいふ。おひふく。やうの駄賃をもつて。とくいふ。乗せた。定の
外うる酒貲ひ。脚氣え。發ひゆふ。茶の價をもつ。べいとむつた
うと呼ふ。曾太郎。又一辺の腰を傍く。出を。一人の橋夫強取をや。
破と抜く。眼を瞬。声をうなだ。一百二百の半残。人の命を買ふもの
か。と我を欺く。とぞ。とぞを。残る一人も。あらうのうへ干遠し。破根
の衣服も脱ぐ。遍ふせ。とじてゆ。と罵りゆ。と。左右うり挟み。ひと置く
競ひ。葛と。曾太郎。急に太ふね。まくは。汝ホ賊まるよ。孤客と云ひ蔑む。可
惜。首とまへ。立。とゆ。笑う。立。目前へ。閃り。息杖を。立と。夜へ
入錯。直す。撲地と。打落せ。と。打惜と。くらうとも。廻者を拂除。頂
髪被く。雄ひ。雌め。頭と。襟と。投げ。岸破と。起。倭侵。まく。前後う。組ん
とも。を。寄せ。著ふ。足を。轍く。丁と。蹴倒し。き。首背へ。掉胡。橋の
内と。押著つ。結下。挑灯の火光ふ。そ。下やく。その面を見。が
と。轍夫へ。別人ゆ。徃ふ。南都を。追放。今市全八郎。布施蝶
九郎。あしう。曾太郎。まく。怪う。羞を。ふ。思物。蝶。松葉。人
席を見。見と。や。とりひつ。腰を。搔脱。全八蝶。九郎。や。この人
うを。裾う。大ふ驚。ひ。ひ。と。慌忙逃れ。と。と。記。立。す
ア。と。引抜く。刀の脊打。肩腰の嫌ひ。う。打と。見。侍と。み。す。ア
頬の先賊。う。景迹。あく。あづ。う。き。包。不忠不義の天罰。あく。



却思ひ增長も。旅客を引剥せんといひ。その罪并へがくと
 階の旅立とべ。奈良へ頬立つてとせど。みやこ一首を懸するう。
 ても羨むや。さす懶一とくどやといひ懲じ。え數回寺ほどみ。全八蝶
 九席苦痛よ堪ど。只ゆ一虫。許一虫と叫びたり。そのうをるちど。
 刀をふるえ。腰に著る小油灯をとう出づ。橋より油灯の灯をうる。
 遂に浪速をさくらひそだまつ。西うきく東廻られべ。その夜へ平岡ふ
 宿りて。彼後者を結ぶ。次の日徒者へ深江まで追著けとど。さる
 被ふ全八蝶九席へ。すうやくふを起く。さう自脉を診。手見る
 とろくよ。唾を塗て拊捺すど。直と呆立す。目を見あつて。蝶九
 席うりす。今夜稀う孤客を家へとれへ。うたをうそとぞ。とらひて
 ふ。幸うきとくとぞ。眼も眩も。かまく死へうきうへ。づふ闇うれびとぞ。
 屋がはゆく足を定むとぞ。汝も吾も。曾を序うとえやひうけぞ。可
 惜肩を費し。刺くにやをえく。忌くと。呪ハ。全ハも面と顰
 や。で傳ハ起とり。がくとすもあひ。わくにたすもあくてやへり。蝶九席
 がくとす。もとすとり。がくとすとすとす。汝もこれか恨ゆ。赤根せせ
 へ。彼ニ猪毛妻う。浪速の長町かありとぞ。えゆり。實ゆくと
 密ふ這奴を結果。三猪を奪ひ去。遠く東の果立と賣遣。今夜
 の捐ハ補ふべ。さんあくねうことふを。全ハすめあへど大不釣び。又
 金の蔓ふ堀當う。ふくあとませめ。ふくを立す。ちのちら。ごく
 法人ふくふ猪毛されば。佛くふく糾が。うせん。がくまと示め。夜の
 山下へ。まく一人もあくねば。うくふ。傳る氣きもあく。声高やく。暗
 谭つ。遂に空矯を打起し。れも平岡のかくとくゆをぬ。抑件の

廿八蝶九竈へ七年以前ふ奈良を追放もくろ。扶津河内の
間と徘徊し。到るとこう悪友との玄參。ぬる爲をすとせ
程小里入ふ憎忌。便ききしほ。入りうとも旅輜を昇
く。生活よきれど耻をもざれが羨うとす。勤シバ旅客を
ふ。非法の縁を貪り人と計較ぬ。固ふ是憎である。憎む
が死癖者。

